

中学英語リーディング教材におけるテキスト性(2)

—結束構造に関して—

千々岩 佳 史*

(1996年6月28日受理)

はじめに

ド・ボウグラント、ドレスラー(de Beaugrande,R.and W.Dressler,1981)の示した「テキスト性の7つの基準」(seven standards of textuality)は、以下のようなものであった。

- (1)結束構造 (cohesion)
- (2)結束性 (coherence)
- (3)意図性 (intentionality)
- (4)容認性 (acceptability)
- (5)情報性 (informativity)
- (6)場面性 (situationality)
- (7)テキスト間相互関連性 (intertextuality)

この中において、第1番目に与えられている結束構造 (cohesion)とは、いかなる機能をもち、どのように現実のテキスト内に具現されているのか。私は本稿において、中学校検定教科書のリーディング教材を例にとり、結束構造における指示 (reference)、とりわけ人称 (personal reference)、指示詞 (demonstrative reference)を軸として、前方照応 (anaphoric reference)、後方照応 (cataphoric reference)、そして外界照応 (exophoric reference)の照応関係を考察したい。その主な理由は、これらの指示・照応関係がリーディング教材において、以外なほど多用されているにもかかわらず、リーディング指導のいわば盲点と考えられるからである。

1 テキストにおける二面性

リーディングにおけるテキストには、さまざまなとらえ方がたがあると言えよう。その1つは、テキストのもつ「伝達手段 (medium)」と「伝達情報 (message)」という二面性に焦点をあてた視点である。McArthur(1983, p.16)は次のように、このことについて言う。

* 岩手大学教育学部

Essentially, the *message* is what a person wants to say about his or her circumstances, some event or whatever, while the *medium* is the linguistic substance and system by means of which the message is conveyed.

(本来、伝達情報とは、人が自分を取り巻く状況や出来事、その他どのようなことについても言いたいことをさし、一方、伝達手段とは、伝達情報が伝えられるべき言語的実体と組織体系をさすのである)

この場合、伝達手段は「どのように (How)」に、伝達情報は「何を (What)」に直結する。つまり、伝達手段とは、テキストの中で、書き手はどのような言語形式を用いて、ある情報をテキストの中に盛り込み、読み手はその言語形式をどのようにリーディングの手がかりとするかということである。また、伝達情報とは、書き手が読み手に何を伝えたいのか、そして、読み手は書き手の何を読み取るかということである。したがって、伝達手段はテキストそのものであり、伝達情報はテキストの中に書き込まれた「意味 (meaning)」なのである。

では、伝達手段と伝達情報の関係はどう考えればいいのか。それは、

伝達情報なしの伝達手段は存在しうるが、その逆はありえない

ということである。伝達情報なしの内容空虚で意味をなさないテキストはありえても、テキストがなければ、伝達情報は伝えようがないからである。たとえば、「伝達情報なしの伝達手段は存在しうる」とは、次のようなテキストをいう。

Carlos arranged to take golf lessons from the local professional. His dog, a cocker spaniel, was expecting pups again. Andrea had the car washed for the big wedding. She expected Carlos to help her move into her new apartment.

(Carroll, 1994 p.155)

(カーロスは土地のレッスンプロからゴルフのレッスンをうける予約をした。彼の飼犬のクッカースパニエルはまたのお産が近かった。アンドレアは盛大な結婚式のために車を洗ってもらった。(彼女は) 彼女が新しいアパートに引っ越すのをカーロスに手伝ってもらいたいと思っていた)

このパラグラフは、個々の1文ずつは何らかの伝達情報を伝えはするが、テキスト全体では何も情報を与えてはくれない。意味不明の文章である。しかし、伝達手段は依然として存在しているのである。ただ、伝達手段、つまりテキスト自身に力点が通常以上に置かれる場合もありえよう。あるジャンルの詩歌・小説がそうかもしれない。が、伝達手段と伝達情報は、本来バランスがとれているべきである。

そして、伝達手段と伝達情報の二面性を、リーディングという言語活動から考えるとどうなるのだろうか。まず、テキストの中において、読み手の意味理解を円滑にするべく、伝達情報ができるだけ整然と配列されていなければならない。この整然と配列される方法が結束構造である。そして結束構造が具体的にテキスト内に表出されているのが「指示 (reference)」という機能であり、指示はさまざまな照応関係をもつと言っていいであろう。

“tree” (referent) in the real world.

(Richards, J. et al. p. 241)

(指示：語とそれが意味する事物、行為、出来事、および特性との関係をいう。英語の例で示すと、*tree* という語と現実世界における“tree”という物(指示対象) との関係ということになる)

「指示 (reference)」とは、私たちを取り巻く外界世界の物、事、思想、概念などと、それを表わす言語形式との関連性をいう。したがって、リーディングにおける指示とは、書き手がテキストの中で読み手にたいしてある何かを指示するために行う言語行動、具体的には、文字をもって書き示すことなのである。この文字をもって書き示された言語形式(話し言葉の場合は、もちろん音声によって表わされるが)は、「指示表現 (referring expression)」、指示表現によって指示された現実世界の事物は「指示対象 (referent)」と呼ばれる。たとえば、指示表現と指示対象との関係は次のようになろう。

指示表現	指示対象
<i>dog</i>	common domestic animal kept by human beings for work, hunting, etc., or as a pet

つまり、「仕事や狩りのためや、ペットとして人間に飼われている、ごくありふれたどこにもいる家畜」というものを「イヌ」と指示表現されるのである。そして、重要なことは、指示表現と指示対象の間には、通例 1 対 1 の固定した意味上の対応関係は存在していないということである。指示表現と指示対象との関係は、任意のものなのである。あくまでも、その対応関係は、ある言語社会の言語使用にかかわる規約 (convention) を含んだコンテキストに依存しているのである。したがって、指示表現の読みは、コンテキストに則った読み手側の推論 (inference) に待たなければならない。次の例の指示表現を見てみよう。

[1]

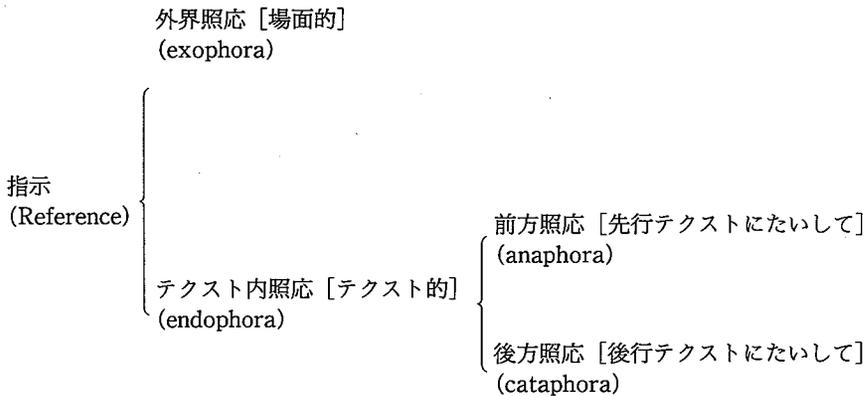
- a. *Shakespeare* takes up the whole bottom shelf.
(シェイクスピア全集は書棚の下段をみんな占めている)
- b. We're going to see *Shakespeare* in London.
(私たちはロンドンにシェイクスピアの芝居を見に行きます)
- c. We hated *Shakespeare* at school.
(私たちは学校でのシェイクスピアの授業は大嫌いだった)

いずれの例文においても、*Shakespeare* は現存の人物ではなく、[1] a. においては「シェイクスピア全集」、[1] b. は「シェイクスピアによる演劇のどれか」、[1] c. は「シェイクスピアの授業・勉強」という読みが、通常のコンテキストにおいては行われるであろう。

以上は、指示の最も簡単な例であるが、読み手が現実のテキストに直面したときには、もっ

と複雑なリーディングを要求されるのである。それは、まずテキスト内の2文以上にわたって、書き手がどのような指示を行っているかを、読み手は推論しなければならないのである。この書き手がなす指示のさまざまな形態がテキスト内の照応関係なのである。

Halliday and Hasan (1976, p.33) によると、指示関係は、概略下の図のようになる。



(図2-1)

本稿では、これらの照応関係が具体的に、どのようにテキスト内において機能しているかを、指示における人称、指示詞に限って考察してみたい。

3 照応関係

第2章図2-1に示した照応関係の順序とは逆になるが、論述の便宜上、まず、指示におけるテキスト内(言語内)照応を、ついで、外界(言語外)照応を述べる。

3. 1. テキスト内照応

テキストのある要素(語句)、たとえば、代名詞 (pronouns; *she, he, it, his, hers, their, theirs,* など)、指示詞 (demonstratives; *this, that, these, those*)、および定冠詞 (definite article; *the*) の読みはどのようにおこなわれるのか。つまり、これらの語句の意味解釈に必要な情報はどこに存在しているのか。それは、テキスト内の指示表現に求められるとしているのである。これをテキスト内照応という。後述する外界照応と対立する概念である。テキスト内照応は前方照応と後方照応とに二分される。

3. 1. 1. 前方照応

これは、テキスト内においてある語句が、それより「前方 (preceding)」、つまり以前にすでに表現されている語句にもどって指示する (refer back) 場合の指示機能をいう。そして、前方照応の指示関係により、当該テキストは結束構造をもつに至るのである。簡単な例を見る。

[2]

Patricia looked down at *her left hand*. *It* was covered with blood.

(パトリシアは自分の左手をのぞき込んだ。左手は血だらけになっていた)

この文章における代名詞 *her* は Patricia を、*It* は *her left hand* を指示し、この文章は結束構造をもつのである。そして、この場合の *her*、*It*、を「照応形 (anaphor)」、Patricia、*her left hand* を「先行詞 (antecedent)」とよぶ。また、このような指示形式を「同一指示 (coreference)」ということがある。ここで、注意すべきことは、2. 2. で述べた、指示という概念である。Green (1989, p. 27) は前方照応について、次のようにいう。

A pronoun does not refer to a noun phrase or other linguistic expression; it refers to whatever object in the world its antecedent noun phrase (also) refers to. This is why they are called "coreferential" — they refer to the same thing.

(代名詞は(それ自体)名詞句ないし他の言語表現を指示はしない。それは、先行詞名詞句が(同様に)指示しているこの世界の中のどのような事物をも指示しているのである。したがって、これらの指示関係を「同一指示」—同じ事物を指示する、と称するのである)

このことを、[2] の文章のうち第 1 文に限って考えてみよう。

[2-1]

Patricia looked down at *her left hand*.

照応形 *her* が指示しているのは Patricia という固有名詞ではない。この世界に存在している幾億という女性の中から唯一的に Patricia という名前によって指示表現されている女性を選択し、先行詞として指示しているのである。では、なぜ *her* という女性を示す人称代名詞(の所有格)で指示されているのか。それは、Patricia という語彙は、典型的に女性を表現する固有名詞として、少なくとも英語圏においては用いられているという事実に基づいているからである。このことは、テキストにおける言語構造にたいする知識能力をこえた、読み手自身のもつ外界世界についての基本的・抽象的な知識経験 (prior background knowledge, or knowledge of the world)、いわゆるスキーマ (schema) の活性化ということと深いかわりがある。

さて、前方照応においては、照応形というのはどのような意味内容を有するのであろうか。[3] の文を見てみる。

[3]

Peel and slice six potatoes. Put *them* in cold salted water.

(ジャガイモを6個皮をむいてうす切りにしなさい。それを冷塩水に入れなさい)

レシピからの文章であるが、[3] において、照応形 *them* は何を指示しているのか。six potatoes か。そうではない。この場合、明らかなように、Peeled and sliced six potatoes な

のである。このように、テキスト内照応における照応形と先行詞の指示関係は、同一物を機械的に指示するものではない。先行詞によって指示された意味が、文章全体の意味によって換算され、変化し、それが照応形の意味内容になるということができる。

では、本論の趣旨である、中学校検定教科書のリーディング教材を例にとり、前方照応を述べる。

[4]

In the north of the city of Hiroshima, an old, tall tree stands by the roadside. (a) *It* has seen many things around (b) *it*.

One summer night (a) *the tree* heard a lullaby. A mother was singing to *her* little girl under (b) *the tree*. " *They* look really happy," (c) *it* thought. " And *the song* sounds so sweet."

Then (c) *the tree* remembered something very sad. " Yes, that was some fifty years ago. I heard a lullaby that night, too."

New Horizon English Course 3, LET'S READ 1. (Tokyo Shoseki) p. 28.

これは、"A Mother's Lullaby"と題する、中学3年前期に扱われるリーディング教材の冒頭3パラグラフである。書き初めの第1文からわかるように、物語文の典型である。

この文章の前方照応関係は以下ようになる。前方照応関係の内部においては、Fox (1987) に詳述されているように、さまざまな階層性がみられるが、ここでは、テキストにおける結束構造の観点から、その大わくを示す。

先行詞	照応形
an old, tall tree	(a) <i>It</i>
(a) <i>It</i> (= an old, tall tree)	(b) <i>it</i> .
an old, tall tree	(a) <i>the tree</i>
A mother	<i>her</i> little girl
the tree (=an old, tall tree)	(b) <i>the tree</i> .
A mother and her little girl	<i>They</i>
the tree	(c) <i>it</i>
A lullaby	the song
it (=the tree)	(c) <i>the tree</i>

こう見ると、前方照応により、これら3個のパラグラフが密接な連関をもち、テキスト内の結束構造を編み出していることが明らかであろう。そして、照応形をなすものは、代名詞、指示詞、定冠詞であり照応形 **the song** が先行詞 a lullaby を指示している場合のみが、2. 1. であげた語彙結束の指示機能である。また、**the song** は a lullaby にたいして、同語反復における上位語 (superordinate) である。

3. 1. 2. 後方照応

テキスト内において、ある語句がそれより後方 (following)、つまり、それより後に表現される語句を指示する場合の指示機能のことである。そして、当然ながら、この後方照応の指示機能により、テキスト内に結束構造が得られるのである。簡単な例を示す。

[5]

This is how you do it. You let the herbs dry and then grind them up in a food processor.
(このように行います。まず、ハーブを乾燥させます。そして、フードプロセッサーで細かい粉末にします)

この文章において、*this* は、第2文全体の意味を指示するのである。読み手にとって *this* の指示詞だけでは、その意味内容は不明であり、リーディングが完了するためには、後続の文を待たねばならない。[5] においては、第2文によってようやくテキスト全体の意味理解は成立するのである。そして、初めて [5] の2個の文は結束構造をもつのである。

このような後方照応の機能は、さまざまな小説類に多く見られる。書き手 (作者) は読み手の興味・関心を後続の文まで持ち込み、持続させるような劇的効果を示そうとするからである。次例などは、その典型であろう。

[6]

'*She's dead. She died at 5.12 p.m. I'm going to find the people who murdered her ...*'
said Philip Cardon.

The atmosphere in the corridor of the Nuffield Hospital was unbearable. Tweed and Paula had just arrived. Too late. *Philip Cardon's wife, Jean*, had died a few minutes earlier.

Colin Forbes, *Fury* (p.1)

(「彼女は死んだ。彼女は午後5時12分に死んだ。彼女を殺した奴らを見つけるつもりだ、」とフィリップカードンは言った。

ナフィールド病院の廊下の雰囲気は耐えられないほどのものだったツイードとポーラはちょうど病院に着いたばかりだった。遅かった。フィリップカードンの妻ジーンは、数分前に亡くなっていたのだ)

これは、やや長編のミステリーのプロローグの第1、第2パラグラフである。ミステリーにありがちな、唐突な書き出しであるが、第1パラグラフの第1、第2文にある *she*、および第3文の *her* は、それぞれ第2パラグラフ最後の文の *Philip Cardon's wife, Jean* を後方照応的に指示する。そして、第1、第2パラグラフは明確な結束構造を示しており、読み手の興味は高まり、ついページをめくるといふ小説 (page turner) を創りだしているのである。

では、このような、やや特異な機能を果たすように思われる後方照応は、中学校リーディング教材では存在しうるのだろうか。じゅうぶんに存在するのである。前項で取り上げた [4] の文章をもう一度考えてみる。

[4-1]

In the north of the city of Hiroshima, an old, tall tree stands by the roadside. It has seen many things around it.

One summer night the tree heard a lullaby. A mother was singing to her little girl under the tree. "They look really happy," it thought. "And the song sounds so sweet."

Then the tree remembered something very sad. "Yes, *that* was some fifty years ago. I heard a lullaby *that night*, too."

この文章の第3パラグラフ指示詞 *that*、*that night* は後方照応である。*that*、*that night* は何を指示しているのか。読み手にとって、後の文章を読むまで不明なのである。果たして、後続のセクションは、次のような文で始まる。

次は、この木が回想しているところです。

[4-2]

The morning before that night, a big bomb fell on the city of Hiroshima. A great many people lost their lives, and many others tried to get away. They had burns all over their bodies. I was very sad when I saw those people.

ここで、読み手は *that night* が、広島に原子爆弾が投下された前夜であることを理解する。そして、*that night* は正確には書かれてはいない。しかしながら、このリーディング教材では、まえがき (Introduction) において、以下のような説明がなされている。

第二次世界大戦中の1945(昭和20年)年8月6日、広島に原子爆弾 (atomic bomb) が投下され、何十万という人がその犠牲になりました。…

ここで、読み手は *that night* が、1945年8月5日の夜であるという意味を理解するのである。後述するが、リーディングにおける教材では、このような、まえがき、さし絵、写真、図版等がきわめて大きな役割を果たしていることを見逃がしてはならないであろう。

では、後方照応における [4-1] の第3パラグラフ第2文の *that* は何を指示しているのか。このリーディング教材の物語に述べられている出来事の内容をすべて、丸ごと指示しているのである。さきに触れたように、指示とは、言語表現、言語構造そのものを指示しているのではないということに、再度注目すべきであろう。そして、この後方照応の機能により、第1、第2セクションが結束構造をなしているということは、言をまたない。

3. 2. 外界照応

テキスト内照応と対立をなす概念である。テキスト内照応においては、テキスト内のある語句の意味解釈に必要な情報は、常にテキスト内の指示関係に求められた。しかしながら、外界照応においては、その情報はテキスト内には存在しないのである。では、どこに求められるか

たとえば、テキストを成立させているコンテキストの中においてなのである。したがって、読み手はコンテキストに依存し、テキスト内の語句の意味解釈をおこなうのである。外界照応において、テキスト内の意味解釈を行わなければならない語句は、代名詞 (pronouns; *she, he, it, his, hers, their, theirs*, など)、指示詞 (demonstratives; *this, that, these, those*)、および定冠詞 (definite article; *the*) 等であり、これは、テキスト内照応の場合と同じである。

外界照応と結束構造の関係はどうであろうか。外界照応は、テキスト内の語句の意味解釈を、テキストのいわば外側にあるコンテキストに依存するので、テキスト内の2つ (以上) の語句を結びつけて意味解釈を行うテキスト内照応とは異なり、外界照応は結束構造をもつことはないといえる。では、テキストにおける結束構造を成り立たせ得ない外界照応は、中学校教材において、特異な性格をもつまれな存在であろうか。実のところそうではないのである。次例を見てみる。

[7]

Mike: What's *that*? Is (a) *it* a boat?

Yumi: No, (b) *it* isn't. (c) *It* can fly in the sky.

Mike: Is (d) *it* a bird? Oh, I see. (e) *It's* a crane.

Yumi: That's right. *This* is *origami*.

Mike: It's beautiful.

New Horizon English Course 1, (Tokyo Shoseki) p. 51.

これは、中学1年前期に取り扱われる対話文である。このテキストにおける指示詞 *that*、*this* および代名詞 *it* はそれぞれ何を指示しているのであろうか。もう明らかなように外界照応なのである。

[7] の対話文は、マイクと由美との会話であり、由美が何かをしているのを、そばでマイクがのぞき込んでいるというコンテキストである。由美は何をしているのか。テキストの後半で理解できるのであるが、折り紙で「折り鶴」を折っているのである。その折り鶴の完成過程が、マイクと由美の会話の時間的経過と重なっている。したがって、指示詞、代名詞と由美が折っている折り鶴の完成手順との関係は、概略、次のようになろう。テキストをもう一度示す。

[7-1]

照応関係

(鶴の折りはじめ)

Mike: What's *that*? Is (a) *it* a boat?

半分ほど折った折り鶴

Yumi: No, (b) *it* isn't. (c) *It* can fly in the sky.

:

Mike: Is (d) *it* a bird? Oh, I see. (e) *It's* a crane.

出来上がった折り鶴

Yumi: Tha's right. *This is origami.*

折り紙を折り鶴で説明
する

Mike: It's beautiful.

ここで注目したいのは、代名詞 (a) *it* ~ (e) *it* 意味解釈である。外界照応における指示の意味解釈はコンテキストに依存しているため、[7-1] における *it* の意味は、それぞれの折り鶴の完成段階とともに、次のように変容しているのである。

代名詞	照応関係
(a) <i>it</i> (b) <i>it</i> (c) <i>it</i>	半分ほど折った折り鶴
(d) <i>it</i> (e) <i>it</i>	出来上がった折り鶴

このような外界照応の意味解釈を行うことは、学習者であるまだ入門期の中学1年生にとって相当困難であろう。したがって、実際の教科書には、テキストの第1文の右横にヒシ形の半分ほど折った折り鶴の写真が添えられている。また、当該ページの下方には折り上がった折り鶴の一部の拡大写真も載せてある。これらの写真によって、学習者は、テキストの中に盛られた外界照応の機能を明確に理解するのである。このような、いわば教科書作成技術は、教材ゆえの特性であり、通常のテキストではまれであろう。教科書執筆者の苦労があるといえようか。また、さきにも触れたように、教材とさし絵、写真との密接な関係は、別の角度から考察されるべきである。

今まで述べた教材は対話文であったが、リーディング教材はどであろうか。以下の教材を試してみる。

[8]

Look at *this picture*. Is *this* a picture of Tokyo? No. It's a picture of my country — Singapore. Singapore is a young country. It's about thirty years old. It's very small, but a great many people live there.

New Horizon English Course 1, LET'S READ 1. (Tokyo Shoseki) p. 78.

これは、シンガポールの歴史、風物についてのべた中学1年後期のリーディング教材の第1パラグラフである。「ぼくに国、シンガポール」と表題がつけられ、

ピンが自分の国のシンガポールのことを紹介しています。

とまえがきと与えられている。したがって、学習者は本課が、シンガポールについての文章であるということは理解できよう。いわゆる、スキーマの活性化 (activation of schema) と言われていることである。

第1文の *this picture* における指示詞 *this* および、第2文の *this* の意味解釈をどのように

行われるのであろうか。外界照応であるそれぞれの *this* の意味内容の理解は、中学1年である学習者にとって、やはり困難といわねばならない。前述の [7] のテキストとおなじく、教科書の当該ページには、シンガポールの風物写真が何葉か掲載されている。そして、[8] のテキストのすぐ上部にあげられているシンガポール市街の写真が、*this picture*、*this* の意味内容となっているのである。この教科書上の写真こそが、学習者の外界照応の意味解釈を助けているのである。そして、[8] のテキストは結束性をもつ。ここにも、教材としてのテキストの特性が如実に示されているといっていいていいであろう。

4 おわりに

私は、中学校検定教科書のリーディング教材を主として、テキスト内照応、外界照応の実際をみてきた。すでに明らかなように、読み手は照応関係を手がかりとして、テキストの結束構造を理解し、テキストを読み進むのである。書き手がテキストに編み込んだ伝達情報の意味解釈はこれによって行われるのである。そして、テキスト内照応はもちろん、外界照応も、中学生段階の読み手にたいしてさえ、その判別能力を要求しているのである。

しかしながら、これら指示および、照応関係の指導はしゅうぶんに行われてきたとは言い難いのである。中学校の教室における読みの指導では、「(代名詞) *he* はなにを指しているのですか」といったような質問が教師からなされるのがせいぜいであった。今後のリーディング指導においては、指示(の表わす意味)、照応関係に、学習者の目を向けさせることが、特に必要であろう。また、「中学校の教材は易しい」などと軽々とってはならない。英語という、学習者にとって外国語である言語を読むという言語活動は、その入門期から相当な難しさを備えているのである。指示、照応関係ということもその1つであろう。教師は、英語の読みの能力を学習者に習得せしめるためには、「中学校の教材は難しい」とあらためて認識すべきであろう。

参考書目

- de Beaugrande, R. and W. Dressler (1981) *Introduction to Text Linguistics*, Longman.
 Carroll, David W. (1994) *Psychology of Language*, 2nd Ed. Brooks/Cole.
 Collin Forbes (1995) *Fury*, Pan.
 Fox, Barbara A. (1987) *Discourse Structure and Anaphora*, Cambridge Univ. Press.
 Green, Georgia M. (1989) *Pragmatics and Natural Language Understanding*, Lawrence Erlbaum Associates.
 Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*, 2nd Ed. Edward Arnold.
 Halliday, M. A. K. and R. Hasan. (1976) *Cohesion in English*, Longman.
 McArther, T. (1983) *A Foundation Course for Language Teachers*, Cambridge Univ. Press.
 Nunan, D. (1993) *Introducing Discourse Analysis*, Penguin.
 Richards, Jack et al. (1985) *Longman Dictionary of Applied Linguistics*, Longman.